アテルイ復権の軌跡とエミシ意識の覚醒

岡本雅享（福岡県立大学）

キーワード：アテルイ、エミシ、東北、復権

はじめに

日本の同質社会化が、内閣総理大臣の「単一民族発言」でピークに達した1980年代後半以降、関東、関西など所謂太平洋ベルト地帯を中心とする地域では、アイヌ、琉球、在日コリアンや新たな移住者という他者の存在を認識し、共生を目指すという文脈で、多様性への見直しが起こるが、東北や南九州では日本人内部の「内なる多様性」の復権、「いくつもの日本」を提唱するという形で、それが現れた。

小説家・高橋克彦は2003年の対談で、「蝦夷（エミシ）の末裔だと胸を張って言えるような人が出てきたのは、ここ15年とか、そんなものだと思う。……自分が蝦夷の末裔だと思っていても、それをなかなか口にしなかった人たちが、最近は言い始めた」と述べている[(1)]。そのエミシの末裔という（民族）意識の醸成において、象徴的な役割を果たしたのが、アテルイ復権運動であったといえよう。

アテルイ（阿弖流為）は8世紀末から9世紀初頭、今の東北への版図拡大を狙う大和の侵略と戦ったエミシのリーダーである。当時、アテルイらを倒すため、桓武天皇が第二次、第三次征討軍の大将に授けた官名が征夷大将軍であり、その称号は幕末に至るまで武家（徳川）の統領の称号として残った。征夷大将軍の由来となった人物―それほどの「重要」人物だが、1980年代まで、地元でさえ、その名を知る人は少なかったという。それは長らく、アテルイが「日本史」の表舞台に出ることがなかったからだ[(2)]。

だが今や、アテルイの本拠地だった胆江地域（胆沢・江刺）では、おそらく知らない人はいないし、東北地方はおろか、その他の地域でも、その名を知る人は増えている。アテルイはなぜ長らく無視されてきたのか。その名がなぜ急速に広まったのか。1990年代以降のアテルイに関する言説を見ると、「復権」とか「顕彰」という言葉がしばしばセットになって出てくる。それは時として、「東北の復権」「エミシの復権」という言葉にも置き換えられる。それを主導した人々の思いを探り、意味したものを考えてみたい。

エミシを蝦夷と書くと、エゾと読んだり、北海道やアイヌ民族を想起する場合があるが、本稿で論じるのは東北人のアイデンティティである。煩雑にはなるが、漢字の蝦夷には必要に応じてルビをふり、片仮名で表記できる場合は、できるだけエミシ、エゾと表記し分ける。

(1) 高橋克彦・赤坂憲雄「蝦夷とはだれか」『日本再考―東北ルネッサンスへの序章』創童舎、2003年、182頁。

(2) アテルイという人名が教科書に記載されるのは、1990年代以降である。1997年度から中学校で使われる歴史教科書を、旧版（1973年度検定分）と比較した『読売新聞』の記事（「教科書20年で様変わり―新教科書と読み比べ」1996年7月1日）は、「最新版には載っているが、旧版では全く取り上げられていない人物が二人いた」とし、アイヌの首長シャクシャインと、エミシの豪族アテルイを挙げている。ただしその時点でシャクシャンを全教科書が取り上げたのに対し、アテルイは7社中3社。後年、7社に増えるが、北海道の先住民族アイヌに対し、東北の先住民族エミシの復権が遅れたことを物語る。

1.エミシをめぐる自意識と他者認識

(1)民族国家の形成とエミシ

拙稿で度々述べてきたが、1880年代後半まで、東アジアには「民族」という概念は存在しなかった。1888（明治21）年、明治維新の王政復古・天皇制国家の象徴となった（架空の）初代天皇カムヤマトイワレヒコ（神武）にちなむ大和民族という概念が、日本最古の文献である古事記（712年）や日本書紀（720年）に基づいて登場したのに伴い、近代国家日本における民族概念は、8世紀初頭という古代に遡って創造（想像）されることになる。1896年に出雲民族という概念が誕生したのは象徴的だが、古代、出雲と同様、ヤマトに「服（まつろ）（伏）わぬ者」とされたエミシ（東北）やクマソ（南九州）も、民族国家創建の過程で、大和民族とは別の民族として構想された(3)。

1870（明治3）年正月、北海道開拓使権判事の大橋慎は、岩倉具視宛の建言書で、天皇が「親征を以て神威を東北に耀し」たことを賛美し、「北海道は皇国東北の極也、嗚呼、神武国を西南に始め、陛下之れを東北に終ふ、実に神武創業に基くの盛業也」と、神武神話の東征を明治天皇が完成したと讃えた(4)。こうした天皇制国家観が、大日本帝国期の歴史教科書には、如実に反映される。

戦前の教科書である文部省『尋常小学国史（上巻）』（1935年）を見ると、エミシとクマソは天皇の威光に従わぬ「人民を苦しめる悪者」で、（たびたび）叛き、騒ぐ、困った「賊」だが、一度大和が動くと、戦わずして降参する情けない輩として描かれている。いっぽう東北は田村麻呂の征討で初めて穏やかになったとして、田村麻呂を東北の恩人として描いている(5)。田村麻呂の対極にあるアテルイは、東北を騒がせた名もなき悪者、賊の首領でしかない。陸前高田出身の松坂定徳（1932年生まれ）は、戦前の学校教育ではアテルイ・モレについて教えてもらったことがなく、ただ「文武両道に優れた坂上田村麻呂が蝦夷の首領を征伐したことにより、東北にも平和が訪れたのだと記憶している」と述べている(6)。

戦後「象徴」天皇制に変わった日本でも、天皇＝大和に服わぬ者をネガティブに捉える観念は、すぐには変わらなかった。教科書を見ると、「ヤマトタケルは……朝廷に従わないくまそを征伐に行き、これを滅ぼしました。……また皇

(3) 例えば、朝鮮総督府学務局社会教育課『古代の内鮮関係』（1937年）は「日本には昔色々種族が多くありましたが、最も大きなものが四つあります。天孫〔＝大和一筆者〕、出雲、蝦夷、熊襲である」と記しているし、津田剛「世界の大勢と内鮮一体」（1941年）も、「我国は古来、日向に天孫族あり、出雲に出雲族あり、北に蝦夷族あり、九州に熊襲（隼人）あり」と述べている。

(4) 難波信雄「日本近代史における『東北』の成立」『歴史の中の東北』河出書房新社、1998年、219頁。

(5) 同書は第3章「日本武尊（ヤマトタケルノミコト）」で、こう記している。「神武天皇が大和におうつりになって後は、天皇の御威光はおひおひ四方にひろがっていった。けれども、都から遠くはなれた東西の国々には、なほわるものが大勢ゐて人民を苦しめてゐた。景行天皇の御代になって、九州の南の方に住んでゐる熊襲がそむいたので、天皇は、御子の小碓尊（オウス）（＝ヤマトタケル）にこれをお討たせになった。……その後、東の国の蝦夷がそむいたので、天皇はまた尊にこれを討たせになることになった。……尊は（駿河の国を経て）軍を東にお進めになったが、蝦夷どもは、御勢に恐れて、弓矢をすてて降参した。かやうにして、尊は国々をお平げになった」。第4章「神功皇后」では「仲哀天皇の御代に熊襲がまたそむいたので、天皇は神功皇后と御いっしょに九州へ下って、これをお討ちになったが、まだよくしづまらないうちに、おかくれになった」とし、第11章「桓武天皇」では、「蝦夷征伐要地図」を載せ、こう記している。「さきに、日本武尊が蝦夷を御征伐なさったが、その後、齊明天皇の御代に、阿倍比羅夫がふたたび舟軍をひきゐて、日本海の海岸地方でさわいでゐた蝦夷をうち平げた。けれども、太平洋にのぞんでゐる地方の蝦夷は、なほたびたびそむいて人民を苦しめてゐたので、桓武天皇は坂上田村麻呂を征夷大將軍としてこれをお討たせになった。田村麻呂は、勇武な生まれつきでひとたび怒ると猛獣でも恐れて逃出すほどであったが、またなさけ深くやさしい人で、笑ふ時には、幼児でも親のやうになついて、はひ寄ったといふことである。田村麻呂は、兵をひきゐて出征し、いたるところでてがらをたて、とうとう今の陸中にまで進んで、賊をうち平げたので、これから、東北の地方は、はじめておだやかになった」。

(6) 松坂定徳「アテルイ没後1200年」『歴史研究』44巻10号、2002年10月、11頁。

(7) 以下、特に注がなければ、本項に関する記述は、平川新『伝説のなかの神―天皇と異端の近代史』吉川弘文館、1993年、

子は東国のえぞを攻め、……悪者どもを滅ぼしました」（『小学社会6年・上』大阪書籍、1967年）などと書いてある。

「日本」の神話で「英雄」とされるヤマトタケルは、クマソと出雲にとっては、だまし討ちをした卑劣な仇であっても、決して英雄ではない。同様に「日本」の歴史で「英雄」とされる征夷大将軍・坂上田村麻呂も、征討されたエミシにとっては英雄ではありえない。それを英雄とし、自らの祖先を賊とする大和中心の歴史観を受け入れるならば、自分の祖先を誇れなくなってしまう。

ところが、近現代の奥羽では長らく、民衆はヤマトタケルや坂上田村麻呂を英雄として崇めていた。この奥羽人のアイデンティティの矛盾は、どのように生じたのだろう。

(2) 矛盾する自己認識

ヤマトタケルや用明天皇の東夷征伐伝説を検証した平川新は、奥羽の民衆は、実際上は律令期やその後の移民を除いて、退治されるべき存在としての蝦夷（エミシ）や「土民」の系譜をひく存在であり、ヤマトタケルや用明天皇は、彼らの先祖を討伐した存在であったにもかかわらず、征服者を自らの神として崇めているとし、その原因を以下のように考察している[7]。

本来、蝦夷（エミシ）は、ヤマト政権に従わない北方（東国）の民に対する総称だったが、中世に至ると、主にアイヌをさす概念に転換し、発音もエミシからエゾに変わった。近世の弘前藩や盛岡藩が、アイヌを「蝦夷（エゾ）」身分として、一般領民から区別・隔離していたため、蝦夷（エゾ）＝アイヌのイメージが、固定化していった。近世段階で奥羽の人々は、蝦夷（エゾ）と聞けば、アイヌを想起していた可能性が高く、征夷伝説や征夷神は、そうした状況の中で形成され、流布したのではないか。津軽郡を支配する大名家は、自系譜を編み上げる中、地域支配の正統性を示すため、蝦夷（エミシ）を「征伐」した側の立場を鮮明にしたとも言われる[8]。エミシを「征伐」するヤマトタケルや用明天皇の東征物語＝エミシ「征伐」譚は、こうしてアイヌ「征伐」譚と誤認された。奥羽人はおそらく、同時代に「蝦夷（エゾ）地」や奥羽に住むアイヌを、東征によって追われた蝦夷（エミシ）の末裔だと思っていたのではないか。そうでなければ、奥羽人が（自分たちの祖先を「征伐」した）ヤマトタケルや用明天皇の東征物語を受容し、それらが民衆世界に祭神として定着した現象を、合理的に説明できない―と。

以上の考察が正しければ、こうして醸成される蝦夷（＝アイヌ）異民族観は、近現代の民族国家の中では、大和民族観への迎合を促すものとなる。異民族の認識は、自らが所属すべき民族への意識を触発する。そこでヤマトタケルや用明天皇の伝承が登場すれば、生み出される民族意識は、天皇を中核にすえて形成される大和民族になるのは理であろう。平川は、奥羽の民衆は、蝦夷（エミシ）を自らと切り離した存在にすることで、天皇制（日本）的秩序の中に取りこまれる契機を持ったと述べている。

実際、奥羽地域には、蝦夷（エミシ）を「討伐」した征夷大将軍・坂上田村麻呂や、前九年の合戦（1051～1062年）で安倍氏を「討伐」した源頼義・義家父子にちなむものなど、多くの征夷伝説がある。田村麻呂や頼義・義家の征夷の功績を顕彰した神社や、彼らが建立したという縁起譚をもつ寺社は数多い[9]。高橋克彦は2000年の対談で、「子供の頃、蝦夷はアヌイと教えられた。アテルイも安倍貞任もまったく別の民族で、言葉も今の東北弁とは違い、東北人の先祖はむしろ田村麻呂や源義家などで、「まつろわぬ民」を征伐してここに定着したと教えられた」とし、「東北の人が自分達の歴史や文化をあまりにも知らないのがつらい」と述べている[10]。

231～235、239、241～242頁に基づく。

(8) 菊池勇夫「東北人とエミシ・エゾ」『東北学』1号、1999年、206頁。

(9) アテルイと田村麻呂に関する伝説や田村麻呂創建・関連の寺社について調べた及川洵は、アテルイ・モレには伝説がほとんどなく、蒐集できなかったが、田村麻呂の伝説は取捨選択に苦労するほど多く、田村麻呂関連の神社も、その多さに驚いたと記している（及川洵『阿弖流為と田村麻呂伝説』2011年、1、253頁）。

(10) 高橋克彦「蝦夷の精神史」『東北学』2号、2000年、223～225頁。

図１　清水寺縁起絵巻（坂上田村麻呂軍の蝦夷征討）

出所：清水寺縁起中巻（部分）　東京国立博物館蔵　Image:TNM Image Archives

(3) 中近世から近代日本における他者による奥羽・東北観

前述した平川の考察が正しければ、近世の奥羽人は、自らを蝦夷（エミシ）の子孫とは思っていなかったことになるが、他者は、奥羽人を依然として蝦夷視し続けており、（自意識と他者による認識の間で）ズレが生じていた。

「清水寺縁起絵巻」の蝦夷（エミシ）征討の絵（**図1**）は、1520（永正17）年の完成とみられている。したがって、ここに描かれているのは、8世紀末ではなく、「16世紀はじめの畿内の人間が思い描いていた蝦夷像」（東京国立博物館の説明）である。裸足で、手足をさらけ出した貧相な武具、皮膚の色も違って描かれているが、中でも目を引くのが、顔立ちの違いであろう。鎧兜の武士に対し、敗走するエミシは明らかに人種の違う者、異形の者として描かれている。

近世に至っても、そうした認識は基本的に変わっていない。江戸時代も、奥羽地方は未開・野蛮視されており、江戸や上方からの旅人は、聞き取れない言葉を話す奥羽人に対し「唐人」と同様のものを感じ、風俗の違いに対しても、「夷風」「夷狄」性を強く感じていたといわれる。1780年代末に書かれた古松軒（備中出身）の『東遊雑記』は、雄物川（現秋田県）の人々の「不礼の体」は「夷狄の風」だとし、神岡や西仙北の人々を、今も昔も変わらぬ「夷人也」と評し、八郎潟付近の山本では「此辺の風俗は……誠に夷人なり」と記し、ニツ井でも「言語の通じなく、北狄の地と外ならぬ」と述べている[11]。

明治に入ってもその意識は引き継がれ、或いは奥羽越列藩同盟をくんで「官軍」に対峙し「朝敵」となった戊辰戦争を経て、かえって増強されたともいえる。明治4（1871）年、江刺県（現岩手県）に赴任した官吏は、同県民を「蝦夷ノ風ヲ存シ、民俗頑愚」で、「動モスレバ猪鹿ノ郡集スル如ク動揺ヲ醸シ候風習」をもつ愚民であると上申し、明治5（1872）年4月の青森県役人・杉山龍江の「奉請北巡建言」は、「僻邑ノ土人ハ殆ド蝦夷ニ近キ者甚虚説トセズ」と

(11) 以下、本項の記述は次の文献に基づく。注（8）菊池勇夫「東北人とエミシ・エゾ」『東北学』1号、200～202、207頁。河西英通『東北―つくられた異境』中公新書、2001年、iv～vi、vii～x、xii、5、38～39、201頁。注（4）難波信雄「日本近代史における『東北』の成立」214、215、216、219、212、220～221、233頁。

(12) 熊谷公男「蝦夷論と東北論」『歴史の中の東北』河出書房新社、1998年、45頁。

報じている。明治12（1879）年から翌13年、東北各県を巡視した元老院議官・佐々木高行宛ての官吏や士族の建言類の中にも、「実ニ四囲ノ国ニシテ往古蝦夷ノ巣窟トナリ久シク我国ノ患害トナリ、今又政府ノ焦心竭力開明ニ導カルルノ困難億測スベキナリ」（青森県）など、夷狄・未開視を露にしたものがある。

本稿ではこれまで「東北」と「奥羽」を説明なく使ってきたが、難波信雄は、「東北」という用語は戊辰戦争の過程で、「朝敵」とされた奥羽諸藩の地に対し、「官軍」側が使い出したもので、初めて「東北」の名を冠した公的機関は、明治4（1871）年8月設置の東北鎮台という軍事機関だったという。維新政権の指導者たちの間には、奥羽越列藩同盟を結んで朝敵藩となった地域に対する「東夷北狄」意識が強くあり、「東北」という命名は、それを反映したものだとも言われる。

難波はさらに、近代日本における東北は、帝国の後進地の典型とされ、その原因は東北の遅れた社会構造や因習の根強さ、住民意識の退嬰性にあるとの見方が大勢を占めていたとし、「後進地東北」は、日本近代の、特に資本主義形成の過程で生み出され、そこから歴史を遡って普遍化された概念だとも述べている。こうして「東北」は、近代国家の形成期（＝明治時代）、後進・辺境・未開を連想させる空間領域として成立させられた。そうした政治情勢と関わりながら、奥羽人を「東夷北狄」とみる観念が、王政復古によって誕生した民族国家・日本の中で復活し、再生産されていったのである。

そのエミシ観は、国際社会に巻き込まれていく近代国家の中で、古代にはなかった意味合いを併せ持ち始める。1876（明治9）年、明治天皇が東北を巡幸した際の権少史金井之恭の筆録『東巡録』は、盛岡を過ぎて北に行くと、「言語風姿亦殆ド異域ノ人二似タル者アリ」と記し、また東北巡幸に同行した『東京日日新聞』の記者・岸田吟香の『東北御巡幸記』も、盛岡以北の渋民駅や沼宮内駅に集ってきた人たちを、「台湾蕃地の民の如く」「野蕃の趣あり」と書いている。菊池勇夫はこれを「露骨に異種人視、野蛮視するような差別感覚」と評しているが、それは近代国際社会の人種概念によって、エミシが再定義されていったことを示している。こうした差別的な圧力を受け、東北人達は、近代の国民統合過程の中で、言葉であれ風俗・文化であれ、異質な負の価値を負わされた標徴を消し去り、対等な帝国臣民になろうと、コンプレックスを内面に抱え込みながら努めてきたという。

民族国家・日本の形成期、「東北」は「異境」として成立させられたという河西英通は、その過程を、東北はどう自己認識し、いかに他者から認識されてきたかという視点で再検討する作業は、日本（人）意識の幻想を解体することに繋がると述べている。前述のコンプレックスを排するためには、それが不可欠だろう。東北人にコンプレックスを与えた近代国家日本は、古代大和政権による統合を、幕藩体制を天皇制に変える正当性の源とした。その中で醸成された国民意識と広まった東北（奥羽）・エミシ観を再考するためには、こちらも一旦古代に立ち戻って、改めて敗れた者の視点から歴史を捉えなおす必要があろう。

2. アテルイの戦いと悪路王の伝説

(1) ヤマトの侵略とエミシの抵抗

東北地方の総面積は本州の3割を占め、独立国家であるオランダやスイスより広い。江戸時代の地図を見ると、本州・四国・九州が68カ国に分かれる中、この広大な地域には陸奥国と出羽国の2カ国があるだけで、その不釣合いは一目瞭然である。その地図上の空間は、そのまま支配の密度の違いのように見受けられる。

『宋書』倭国伝には、478年の倭王武の上表文として「東は毛人（エミシ）を征すること55国、西は衆夷を服すること66国」との記載があり、当時、すでに倭国の東にある国々の人達が「毛人（エミシ）」と呼ばれていたことが知られている[12]。720年の『日本書紀』は、そのエミシを「東北地方に居住し、

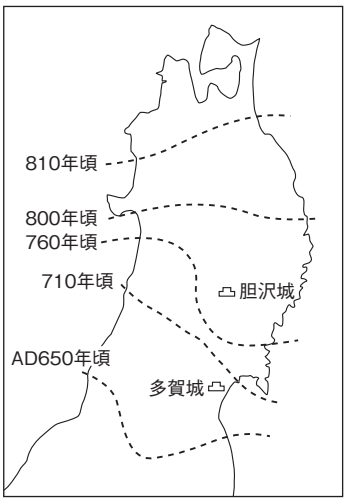
(13) 坂本太郎他校注『日本書紀 (2)』岩波書店、1994年、364頁。エミシを異種族視する記述は、景行天皇40年7月の条や斉

反抗する異種族」とみなしている[13]。エミシの漢字表記は、より古くは「愛瀰詩」や「毛人」だったが、中国の「東夷」を真似て「蝦夷」に変えたといわれ、その漢字表記に「蝦（エビ）」という動物名を当てたのは、非ヤマトの地に、人間として扱えない種族が住んでおり、それすらもヤマトに服属することになったことを示す狙いがあったともいわれる[14]。

東北にアイヌ語地名が数多く見られ、またマタギ言葉の中にアイヌ語と共通する単語が存在することは、ある時期まで、東北の言語が現代アイヌ語と同系統の言語であった大きな根拠とみなされている[15]。『日本後紀』は延暦18(799)年2月の条で、陸奥国新田郡の弓削部虎麻呂らが、長年「賊地」に住み、エミシの言語に熟達し、しばしば夷俘（捕虜になったエミシ）をそそのかしたため、日向国に流されたと記す。元慶の乱（878年）の際、事態の収拾にあたった小野春風は、夷語に巧みであったため効を奏したといい、またエミシと戦う軍には通訳がいたと記す史料もある[16]。ヤマト（倭、大和）の勢力は、その異質で広大な世界に、徐々に版図を拡げていった。

7世紀半ばにおけるヤマト政権の勢力圏は、国造の国が置かれた地域を含めても、本州北岸の新潟平野南部と南岸の阿武隈川河口を結ぶラインまでしか及ばず、現在の福島県を除く東北5県のほぼ全域は、エミシの領域だった。その後ヤマト政権は、**図2**のように、北への勢力拡大を図る。日本書紀（720年）は、景行天皇27年2月の条で、東国から帰った武内宿禰が「東の夷の中に、日高見国あり。その国の人……人となり勇み悍（こわ）し。これを総べて蝦夷（エミシ）と曰ふ。また土地沃壌（くにこ）えて曠（ひろ）し。撃ちて取りつべし」と奏上するくだりで、その侵略意識を顕にしている。ヤマト政権は8世紀初頭、今の仙台手前だった版図を、8世紀半ばには仙台平野を含む地域まで、8世紀末には今の平泉あたりまで、拡大していく。エミシは抵抗し、780（宝亀11）年には大和勢力最北の軍事拠点・多賀城を焼き討ちした。

図2　ヤマト勢力圏の北上



出所：北天会『大和政権と蝦夷の確執』掲載の図「東北の城柵と朝廷勢力の北進」(28頁)をもとに著者作成。

794（延暦13）年に平安京を造営する桓武天皇は、その前後にわたり、大和政権の強化と版図の拡大を狙って、エミシの国への侵略を激化させる。その大和の侵略を10数年にわたって防いだのが、胆沢を拠点とするアテルイたちであった。

日本書紀等によれば、桓武天皇は788年、紀古佐美を征東将軍とする5万3000人の大軍を派兵するが、翌年、アテルイ率いる（2000人弱とみられる）エミシ軍に迎撃され、敗退した。エ

明天皇5年の条に見られる。

(14) 谷川健一「蝦夷と隼人」隼人文化研究会編『隼人族の生活と文化』雄山閣、1993年、371頁。

(15) 地名以外に、アイヌ語で「高い村」の神を意味する理訓許段（リクコタン）神を祀る、陸奥国気仙郡の式内社・理訓許段（リクコタン）神社（現・岩手県陸前高田市高田町）などの固有名詞もある（山浦玄嗣『ヒタカミ黄金伝説』共和印刷企画センター、1991年、27頁）。また東北地方のマタギは青森県から新潟県におよぶ奥羽山脈の山間地で専ら狩猟を行う人々で、山に入った時には日常の話し言葉（里言葉）を話してはならず、マタギ(山言葉)を使わなければならなかったが、そのマタギ言葉の中には、「ワッカ(水)」「セッタ(犬)」「サンベ（心臓）」など、アイヌ語と共通する語が多く存在する（工藤雅樹『蝦夷の古代史』平凡社、2001年、223、226頁）。

(16) 注（14）谷川健一「蝦夷と隼人」『隼人族の生活と文化』369頁。注（15）工藤雅樹『蝦夷の古代史』168頁。

(17) 注（9）及川洵『阿弖流為と田村麻呂伝説』54頁。

ミシが大和に初めて勝ったこの「巣伏の戦い」は、アテルイ復権運動の中で、象徴的な存在となる。大和政権は794年には10万の大軍を擁する第二次胆沢征討軍で侵攻し、胆沢地域を焦土と化すが、攻め落とせず、撤退。アテルイ率いるエミシ軍は、この戦いで多くの戦死者を出し、75の村が焼き払われる大きな損害を被った。及川洵は「副将軍4人、軍監16人、軍曹58人という、胆沢という小地域―推定人口7300人（延暦8年の戦死者を除く）―を攻撃するのに、人道的配慮を全く無視し、ただ征服のみを意図した前代見聞の征夷軍の編成に対し、どう表現したらよいか、憤りさえ感じる」と述べている[17]。

その打撃から立ち直る間もない801年2月、桓武は坂上田村麻呂を征夷大将軍に任じ、4万人の第三次胆沢征討軍を差し向ける。田村麻呂は9月下旬、「夷賊を討伏せり」という将軍奏を発し、翌802（延暦21）年、胆沢に新たな軍事拠点・胆沢城をつくる。同年4月、アテルイは副将格のモレらとともに500の騎兵を率いて「投降」したといわれ、その後田村麻呂に伴われて京へ行き、河内国でモレとともに斬殺された。田村麻呂は朝廷にアテルイらの助命を嘆願したが、公家たちが「虎を養いて患を遺す」ものだと反対したと『日本紀略』は伝える。このくだりから、近年、アテルイを主人公とする小説やミュージカルでは、田村麻呂とアテルイの友情が描かれているが、500騎の余力を残して「投降」したというなら、それは降伏ではなく、アテルイは和睦のために京へ行き、結局、大和政権に騙まし討ちされる形になったのではないかとも思われる。

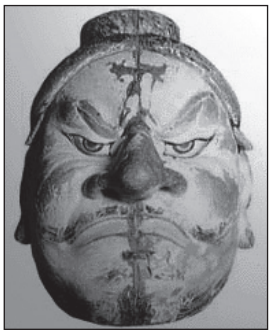
アテルイを滅した大和政権は、その版図をさらに北へ拡げ、9世紀半ばには今の盛岡を含む地域まで北上させた。それに対するエミシの抵抗も度々起こり、『三代実録』は元慶2（878）年3月の条で、出羽の野代（能代）、上津野（鹿角）などの俘囚（大和政権に投降、帰順したり、捕らえられたエミシたち）が「反乱」を起こし、秋田城に焼き討ちをかけたと記している（元慶の乱）。その俘囚の勢力が、安倍、清原、奥州藤原氏へとつながっていくが、その歴史へはここで深入りしない。本稿が注目するのは、エミシの国を守るため、命を賭して戦ったアテルイらが、その後、大和を正統とする歴史の中で、良民を悪政で苦しめた逆賊とされ、自分達の子孫の間でさえ、そうした伝説が浸透していくことである。

(2) 東北の鬼と悪路王の伝説

東北には鬼が多いといわれるが、その中にはエミシが鬼として語られてきたものが少なくない[18]。中世の『御伽草子』や『元享釈書』（1322年）など、田村麻呂らが悪路王、高丸、大嶽（武）丸などの「鬼」を討伐する話が非常に多い。エミシの首長を象徴する悪路王（**図3**）は、高丸や赤頭とともに「三鬼」と呼ばれる鬼、悪鬼羅刹として語られるようになった。

奥州平泉の旧跡・達谷窟（たっこくのいわや）には、その悪路王にまつわる次のような伝承がある。「1200年の昔、悪路王、赤頭、高丸等の蝦夷がこの窟に塞を構え、女子どもを掠めるなど暴虐の限りをつくし、国府もこれを制することが出来なくなった。そこで桓武天皇は坂上田村麻呂を征夷大将軍に命じて、蝦夷征伐の勅を下した。対する悪路王らは達谷窟より3000余の族徒を率いて駿河

図３　悪路王首像



出所：鹿島神宮所蔵、江戸時代中期奉納

(18) 以下、東北の鬼と蝦夷に関する記述は、大湯卓二・門屋光昭他『東北の鬼』岩手出版、1989年、18、19、139、140～143頁に基づく。

(19) 注（15）山浦玄嗣『ヒタカミ黄金伝説』352頁。

国清美関まで進んだが、大将軍が京を発するの報を聞くと、武威に恐れをなし窟に引き返し、守を固くした。延暦20（801）年、大将軍は窟に籠り、毒矢をふらす蝦夷を激戦の末打ち破り、悪路王、赤頭、高丸の首を刎ね、遂にこれを平定した」（達谷西光寺「達谷岩窟毘沙門堂縁起」）。延暦20年に坂上田村麻呂と戦った蝦夷の首領といえば、この伝説がアテルイと田村麻呂の戦いに由来するものであることは、容易に察しがつく。

岩手の鬼伝説の地は、ほとんどが田村麻呂の征夷と関わっている。江戸時代、村名でもあった鬼死骸（一関市真柴）は、田村麻呂に討たれた大武丸の死骸を埋めた所だという。江刺地方には、大武丸の子の人首丸（ひとかべまる）にまつわる話が多い。人首丸は15、6歳の若武者で、田村麻呂の女婿である田村阿波守兼光に討たれた時、鬼だが、取った首を見ると顔は人、しかも美少年だったという。地元民は、明治8年までこの地を人首村と称して、人首丸を偲んだ。現地には、「鬼っこの墓」と呼ばれてきた石碑がある。

気仙地方にも田村麻呂に追われていく鬼伝説が多い。三陸町の越喜来（おきらい）は、「鬼」が喜んで来た＝鬼喜来に由来し、「鬼」の隠れ場所だったが、田村麻呂が海から上陸して討ち取り、死骸をバラバラにして海に流したという。この時、たくさんの「鬼」を沢に追いつめて殺したので「鬼沢」と呼び、またバラバラの死骸が流れついた所を「首崎」「脚崎」「牙ケ崎」などと名付けたという。そもそも岩手は、県名自体が鬼伝説に由来するといわれる。盛岡市三ツ割の東顕寺境内にある三つの石は、「鬼の手形」で知られるが、田村麻呂に三人の蝦夷が降伏し、その誓約の証に、岩に手形を押したという伝承がある。岩手では鬼＝エミシにまつわる伝承は、このように枚挙にいとまがない。青森県内でも、坂上田村麻呂の辺夷、夷賊の征討伝説が広く語られており、その中では、服わぬ蝦夷が鬼としてたびたび登場する。ケセン語研究で知られる山浦玄嗣医師（大船渡在住）は、著書『ヒタカミ黄金伝説』の中で「彼ら（エミシ族―われわれケセン人の直系のご先祖様）は自らの尊厳と自由を守って、非道な侵略者であったヤマト帝国に果敢な抵抗をしたために、鬼と呼ばれ、まつろわぬ賊と罵られ、闇に葬られた」のだと述べている[19]。

直木賞作家の三好京三（1931年、前沢市生まれ）は、2002年夏、インタビュー記事で「悪路王の像を見ても分かるように、歴史は朝廷側の都合のいいように作られている。ここに住む人たちも、それを教え込まれてきているので、蝦夷と呼ばれる祖先のことを否定する傾向があった」と語っている[20]。三好は前沢では昔、「母体はモライが住んでいて、きかない奴が多いところだから、嫁や婿には行かせない」という話があったことを紹介し、「アテルイやモライは、侵路されたので故郷を守ろうと戦ったのだ。決して、悪人ではない」と述べている。田村麻呂は津軽地方に行ってもいないのに、弘前ねぶたの起源は、田村麻呂が蝦夷征伐に際して大きな灯篭を作り、蝦夷をおびき寄せたことによるといわれてきた。三好は、一昔前まで東北地方には、稲作までも田村麻呂が齎したという間違った伝承さえあったという。

河北新報社編集局『蝦夷―東北の源流』は、「自らの祖先を凶悪な人種と教えられ、信じ込まされてきた東北の人々の立場、心情といったものを考えてみずにはいられない」と述べているが[21]、前述の達谷窟の話を幼少の時分、祖母から寝物語として聞かされたという伊藤満は、2001年、漫画『北の将星アテルイ』出版にあたって、こう述べている。「合戦の場所が明確であった上、現在の地名由来となったエピソードにも脈絡があり、ただの昔話や民話でなく史実と思い込んでしまった。わが郷土には恥ずべき先人がいて、正義は都に存在したのだと、負い目にも似た思いを強く抱かされたのだ。十数年後、私はアテルイの名を知ることになる。

(20)「三好京三さんが語る、古代東北とアテルイ・モレ像」『広報みずさわ』591号、2002年7月、4、5頁。
(21) 河北新報社編集局『蝦夷―東北の源流』河北新報社、1979年、343頁。
(22) 伊藤満『北の将星アテルイ』無明舎出版、2001年、124～125頁。

……調べてみると悪路王と同様、坂上田村麻呂と一戦を交えた人物であることが分かった。また田村麻呂は大和朝廷の手先であり、陸奥国への進軍は悪人退治ではなく、侵攻であったことを知った。以来、アテルイは郷土の先人の濡れ衣を晴らし、私自身の誇りを回復させてくれる存在となった。侵攻に抗したアテルイが悪のはずがない。……長い間、恥ずべき存在と考えていた先人への償いに、アテルイの武勇伝をマンガにしようと考えるようになった」。伊藤は「鬼であったり盗賊であったりの差異はあるが、東北各地には悪路王伝説と似たような言い伝えが、寺社縁起と一対になって数多く残されている。……私と同様……中央への負い目と劣位感を刷り込まれた方も少なくないのではないか」とし、そのような人たちが、「少しでも負の要素を払い落とし、より東北の地を愛おしく思えるよう」にと願って、『北の将星アテルイ』を描いたという[22]。

『岩手日報』（1991年5月8日）の「人」欄で、「アテルイを顕彰する会」の藤波隆夫会長（当時）は、アテルイの顕彰活動を行う理由を聞かれ「坂上田村麻呂、源頼義・義家親子など、東北を征服した人物だけが称賛される。地元の英雄の敗者復活という気持ちがある」と答えている[23]。それ故に、逆賊とされたアテルイを、あえて英雄として再評価する動きが、1980年代の東北地方で起こったのである。だが、東北住民が目指したのは、単なる歴史としてのエミシ観の再考ではない。近現代以降の日本の東北観を払拭し、今の東北に誇りを持ちたいという願いが、そこには重なっているのである。

3. 東北「熊襲」発言事件にみる現代日本のエミシ観

菊池勇夫は、列島社会における近世・近代の奥羽人・東北人の自己認識は何とも落ち着きが悪いという。自らを蝦夷の系譜とは無関係なところに置いて、征伐者の立場にあることを言って憚らず、「日本人」あるいは「大和民族」の一員であると意識しながら、一方で他者からは蝦夷視されるという矛盾関係に投げ込まれていた。この関係性のなかで、奥羽人・東北人はコンプレックスに悩まされ、その他者から指さされた「蛮性」「後進性」を剥ぎ取って、国民としての普遍性を獲得しようとする方向に努力させられてきたとする。そうした「東北観」は現代日本に至っても、完全に払拭されたわけではない。それを1980年代末に生じた東北「熊襲」発言事件と、それについて2010年前後、インターネット上で交わされた言説に焦点をあてて、考えてみたい。

山浦玄嗣は1986年秋に出版した著書で、こう記している。「日本列島に生まれ育ってきたあらゆる文化は、みなそれぞれに尊いものです。人に上下の別がないのが民主主義の原則です。それならば、文化にも上下の別はありません。京都の貴族の文化も、「賤民」「山がつ」「エビス」の文化も、どうして上下の別がありましょうか。たまたま貴族の子に生まれたり、たまたまエミシ（エビス）の子に生まれたりした偶然性によって、人間に貴賤の差別をつける愚行を、我々は今日なお平然として犯し続けています」[24]。1年半後、それを絵に描いたような事件が起こった。

(1) 大阪商工会議所会頭がもらした畿内人の東北観

1988年2月28日夕方、TBS「報道特集」が首都移転問題を扱った際、東京―大阪分都論の佐治敬三・大阪商工会議所会頭が登場し、仙台遷都論に反対する中でこう語った。「仙台に遷都したらええちゅうようなアホなことを考えている人がおるそうやけど、東京から大阪までの間には6000万ないし7000万の人間が住んでおるそうです。北の方になんぼ住んどるか知りませんが、大体、熊襲の産地、熊襲の国ですから、そんなたんと住んでるはずがない。文化的程度も極めて低いということになれば、新しい分都は

(23)『アテルイ通信』第1号、1991年5月、9頁。
(24) 山浦玄嗣『ケセン語入門』共和印刷企画センター、1986年、20頁。
(25) 以下、佐治会頭の東北「熊襲」発言とその反響に関する記述は、次の文献に基づく。『河北新報』掲載の「東北差別の過激

やはり、大阪―東京間に行われるべきではないか」。この部分は同月、ホテルニューオオタニ大阪で開かれた、近畿商工会議所連合会（関西三商工会議所）主催の民放テレビシンポジウム「地球時代の近畿の役割を考える」で佐治会頭が行った講演の録画で、「熊襲」「文化程度」云々のくだりで起きた会場の笑い声も、はっきりと放送された[25]。

同夜からTBS系列の東北放送に抗議の電話が殺到し、翌2月29日の河北新報朝刊が「東北差別の過激な発言」と題して報道。これにより、「蝦夷」を「熊襲」と混同し、言い間違えた、このいわゆる東北「熊襲」発言に対し、東北で激しい反発が起きた。佐治の発言は大阪商工会議所会頭としての発言だったが、テレビでは発言の際、「サントリー佐治敬三社長」との字幕が出ていたため、強烈なサントリー・ボイコットが生じた。同社製品の不買運動が起こり、仙台市内の酒屋や歓楽街からサントリー商品が消え、東北の民放ではサントリーのCM放送を廃止する事態に発展していく。当時の新聞を見ると、佐治会頭は「日本を代表する文化人の一人」と評されていた。その人物が「東北は熊襲の産地、文化程度も極めて低い」と述べた。怒りと「日本」への失望が入り混じったであろう。

3月18日付け英国の経済専門紙 Financial Times に掲載された東京特派員の記事 “Suntory Chief's Outburst Scotches Whisky Sales” は、佐治発言を、「少数民族や人種をめぐる差別発言」とし、「英国のアイルランド人やスコットランド人、ウェールズ人について無礼なことを言う」ケースと比較しながら報じている。英国人から見れば、東北人への蔑視は、英国におけるアングルスとケルトの関係に似た民族問題として映ったのである。アテルイの本拠地、岩手県胆沢・江刺地域（現奥州市）の『胆江日日新聞』は、同年3月8日の「熊襲発言」で、「正統な大和民族が住むわが関西に対し、東北は被支配階のエゾが住む地域と言いたいところを、熊襲と取り間違えたのだろう。その闇雲のお粗末発言が余計東北人を小バカにしていると受けとられた」と報じている。

(2) 東北人の怒り

東北における佐治会頭発言への批判は広範にわたった。政界では3月4日、岩手、宮城の両県議会が「強い憤りを覚える」との抗議声明を採択し、福島県議会も3月9日、これに続いた。東北出身者が多い北海道では3月9日、横路知事が道議会本会議で佐治発言を批判した。民間では3月4日、宮城県農協青年連盟と農協婦人部連絡協議会が「東北という風土に根ざした生活・文化そのものを否定するものであり、断じて許せない」とする抗議文を送っている。3月8日、秋田市で開かれた秋田経法大・秋田矩大合同謝恩会でも、卒業生代表が「東北で暮らしている我々の生活すべてを否定したものだ。悔しい」と話し、学長も「文化程度が高いとか、低いとかは何が基準なのか」と批判した。

論壇をみると、『河北新報』3月3日の「佐治発言に物申す」には、「東北は文化程度が極めて低いという佐治敬三サントリー社長の発言を聞いて、我慢がならないほど腹を立てている。……佐治社長の住む関西には、確かに古い伝統に支えられた文化がある。だがそれと同じように、東北には東北らしい文化があり、……それは私達にしかできない生き方、文化なのだ」という仙台市野草園園長らの投稿が掲載されている。同新報3月7日の「続・佐治発言に物申す」には、「長年にわたって、この東北の地にいわれなき偏見と差別を押し付けてきた歴史的事実が、改めてオーバーラップする」（多賀城市、69歳男性）等、より多くの人からの投稿が掲載されている。その中で、怒りの根拠に言及して

な発言」（1988年2月29日）、「波紋拡げる佐治発言―宮城、岩手の両県議会、議長名で抗議声明」（同年3月5日）、「佐治発言―怒り収まらぬ東北、続々と不買宣言」及び「デスク日誌」（同年3月7日）、「佐治発言はまことに残念―北海道知事初めて批判」及び「福島県議会も抗議文」（同年3月10日）。「佐治発言騒動―英でも報道」（同年3月20日）。『秋田魁新報』掲載の「サントリー許せない―学生もボイコット」（同年3月9日）。『熊本日日新聞』掲載の「佐治発言は遺憾―関経連会長・東北財界に陳謝」（同年3月5日）、「佐治社長、東北差別発言、深くお詫び」（同年3月17日）。

(26) 菊池敬一『北天鬼神―阿弖流為・田村麻呂伝』岩手日報社出版部、1990年、294～295頁。

いるものを挙げてみよう。「佐治敬三サントリー社長の発言は、誠に侮辱的であり、はらわたが煮えくり返るほどの怒りを覚えた。人種差別とも言える不見識な言葉は、単なる「失言」として許すわけにはいかない。……120年前の戊辰戦争以来、東北地方は不当な冷遇を受けてきた。「白河以北一山百文」と軽視され、政治の光を断たれてきた。……佐治発言はまさに「白河以北一山百文」が生き残っていた証左として、ひとしお腹に据えかねた次第である」（仙台市、66歳男性）。また「昭和10年前後の中学時代を大阪で過ごした」という当時67歳の男性（仙台市）はこう述べている。「クラスに東北出身者は私だけで、何かと奇異の目で見られ、言葉の問題だけでなく、何かとからかわれたことが多かった。当時……関西人にとって東北人は貧乏でいじましく、暗い人間の集団であり、われわれとは違うのだという意識が根強くあったようだ。こうした偏見は遠い昔のことと思っていたが、佐治氏の“熊襲発言”を聞き、彼ほどの知識人でさえ、根深いところで、こうした東北蔑視の意識が依然として潜在していることに、ただただ驚いている」。

これまで、この東北「熊襲」発言は、佐治会頭個人の発言として、また（経済的関心から）サントリー・ボイコット運動として語られることが多かった。だが筆者は、佐治会頭個人の発言よりも、その時会場（大阪）にいて、「熊襲」「文化程度」云々のくだりで笑った不特定多数の人々の存在に、より問題の根深さと、拡がりを感じる。『河北新報』は、「大阪人は東北の実情をよく知らない。佐治氏と同じような認識の経済人は大勢います」という、大阪勤務の経験がある在仙台の銀行マンの言葉（いずれも3月7日）を載せているし、同社報道部副部長は「今度のことで、関西財界には「東北は文化程度が低い」という……常識がまかり通っているらしいことが分かった」と述べている。佐治発言は、氷山の一角であることを見抜いていたのだろう。

『胆江日日新聞』は3月11日の論説で、こう述べている。「東北べっ視は相変らず根深い。見ようでは、佐治という人は正直すぎて、単純明快に関西人の本心を代弁したようでもある。顔をほころばせ、低姿勢で接しながら、心底では東北人に対して軽べつを充満させている人間こそ、あるいはさらに警戒すべき人種かもしれない」。心の底に押さえ込んできた「日本（ヤマト）」世界への不信感が刺激され、東北各地で噴きだしたといえる。

岩手の作家・菊池敬一は、その2年後に出した著書で「東北の古代史は、安倍氏の敗北で消され、平泉の壊滅で消され続けた。化外の地に文化が存在してはならない。文化とは中央権力が辺地に恵むもの、という思想が、常にこの東北の文化を否定し続けていたといっていい」と述べている[26]。菊池は後年、この事件そのものについて、「熊襲と取り違えた蝦夷に対する否定的なイメージが無意識のうちに言葉として語られたところに、文化意識あるいは歴史意識における根の深さがあった」とし、「東北人を見下げるような差別の視線は今日においてさえ、完全になくなってはいない」とも述べている[27]。

(3) 再生産される東北人蔑視観

この20年以上前の事件を筆者が本稿であえて取り上げるのは、この菊池の憂慮が的中しているからである。インターネットの「２ちゃんねる」で2008年1月18日に開始された「舌禍・東北熊襲発言」と、2010年11月21日に開始された「あらためて『東北熊襲発言』を考える」への書き込みを見ると、佐治発言に喝采を送ったり、東北人への蔑視意識を顕にした以下のような言論が散見される。「東北人は出稼ぎ田舎者の劣等人種」（2008.7.1）、「蝦夷土人どもは、いい加減、佐治を許してやったらどうだ」（2009.1.12）、「東北の蝦夷どもはなんでキレたんだ？熊襲と間違えられたからか？文化程度も極めて低い―これ自体は間違いじゃな

(27) 注 (8) 菊池勇夫「東北人とエミシ・エゾ」『東北学』1号、202頁。

(28) 工藤雅樹は、戦前・戦後を通じて、学界では蝦夷アイヌ説と蝦夷日本人説が説かれ、対立していたが、東北地方の古代文化

い」(2009.1.14)、「東北は陰険な出稼ぎ蝦夷土人の産地、経済的・文化的程度も極めて低い」(2009.4.3)、「差別されるのは劣等人種なんだから当然」(2010.1.13)、「白河以北一山百文―蛮人は関東に入ってくるな」(2010.8.25)、「東北人は野蛮人」(2010.11.22)、「東北蔑視は当たり前です。山から転がり落ちてきたような粗野な人間しかいない」(2010.11.27)。このように書き込みの中には、単に差別的な発言というだけでなく、人種主義的なヘイトスピーチに該当するものも含まれている。

2011年3月11日の東日本大震災を経て、フォーマルな社会での同情的な論調（後述するように、それも問題を含んでいるが）とは裏腹に、２ちゃんねるでは、こうした人種主義的な書き込みが増え、エスカレートしている。「東北人は日本の最下層に毛が生えた程度の身分、TVを割いて報道する必要はない。……日本の外国・東北人は……役立たずの劣等人種、日本に寄生する無能な害虫、滅びればよろしい」(2011.3.16)、「ゴキブリ以下の東北民は被爆している」(2011.3.19)、「東北人被爆してるって言われるけど……少しは被爆して頭がよくなれば良い」(2011.3.28)、「佐治さんは悪い事は言っていない。今回の震災で東北民のアホさ加減がよく分かった」(2011.4.4)、「仙台のような田舎に首都を移転させろ、と言う方が熊襲（発言）より暴言でしょう」(2011.4.27)、「（佐治社長は）陳謝したらしいが、その必要は全くない」(2011.4.29)、「首都を野蛮な土地である東北に移転しようという妄想をサントリー社長は批判しただけで、何ら騒ぐことはない」(2011.5.31)、「古代から東北は化外の未開蛮族の住む異国、文明不毛の暗黒地域、……日本で最も文化レベルが低いのは東北」(2011.6.17)、「東北人は熊のような野蛮な顔をした者が多い」(2011.6.29)、「仙台遷都なんて皇室にも外国にも非礼です。東日本大震災は、こうした首都移転派に対する神の警鐘」(2011.6.29)、「サントリー社長の発言が失言だなんて、とんでもない。的を得た正論だった」(2011.6.30）等。

これらを見ると、東北「熊襲」発言への怒りが未だに消えない理由がうかがえる。それは、発言を陳謝し、すでに故人となった佐治会頭への怒りではなく、その発言に喝采を送り、東北人への蔑視を顕にする日本人が再生産されていることへの憤りなのであろう。2ちゃんねるへの書き込みは、戦前の教育を受けたような世代ではなく、これからの日本を背負う若年・青年層が多いといわれる。東北人が佐治会頭の「熊襲」発言を忘れられないのは、そうした意識が、社会に潜在することを感じ取っているからだと思われる。

4. エミシの末裔という自意識

1980年代後半、単一民族発言と同時期、関西人の企業家によって起こされた東北「熊襲」発言は、畿内を中心とする大和人が東北人を見る目が、古代大和政権の時代の夷狄意識から変わっていない、いや明治以降の天皇制国家の中で再生産されていることを露呈している。「根っからの京都人」を自称する伊吹文明の「大和民族が日本の国を統治してきたことは歴史的に間違いない事実」という発言（2007年2月、当時文科相）も、そうした意識の表れだろう。従来の東北では、それに対し、大和との同質性、日本人としての一体性を説いて、自己の立ち居地を図ろうとする言説が多かった。だが、それではマイノリティを見下すマジョリティに迎合するだけで、本当の精神的な解放は得られない[28]。

世界で多文化主義をはじめとして多様性をポジティブに捉える価値観が普及し始めた1980年代以降、東北では、エミシの末裔という意識で、自己のアイデンティティを確立しようとする人や言説が現れてきた。そうした言説を、ここでは2例、みてみよう。

河北新報社編集局『蝦夷―東北の源流』(1979

が日本文化の枠の中に納まり、東北の文化も西日本の文化と基本的には同質であることを強調し、それを以って東北の古代文化は遅れたものではなかったとする「蝦夷日本人説」は、ある部分で東北人の自尊心を満足させたかもしれないが、他方でアイヌ文化を遅れたものとして差別する論理を内包していたと述べている（注（15）工藤雅樹『蝦夷の古代史』229頁）。

(29) 注（21）河北新報社編集局『蝦夷―東北の源流』344～346頁。

年）は、最終章で「東北人が異民族・エミシの末裔―結構じゃないか」「われわれは蔑視されたことも含めて、大和人とエミシ族にある種の違いがあったのだと認識し、それをもっと前面に押し出していくべきではないか」という詩人・斎藤彰吾の言葉を紹介しながら、次のように述べる。「東北出身者がしばしば陥るズーズー弁コンプレックス。これを、民族が異なるのだから言葉が違っていて当然なのだと考えれば、いたずらに悩んだりする必要はなくなるだろう。……東北の人々は、蝦夷とそしられているうちに「民族が違うのだから」と開き直る姿勢を欠落させられ、そうした理念を共有できずに過ごしてきた。西の文化が優れているのだと思い込まされ、自らの文化を卑下せざるを得ないような状況に立たされてきた。……われわれ東北人がなすべきは何か。それは、蝦夷とそしられつつ滅亡を強いられた……阿弖流為、安倍、清原、藤原氏の生きざまの中に見いだせると思われる。―彼らは……奥羽の血脈を守り、その血脈に殉じたのである。われわれ東北人の務めは、彼らと同様に、東北の大地に自らの足でしっかと立ち、エミシの歴史を背負って、エミシ文化を確立することではなかろうか。……東北人の祖先が蝦夷と呼ばれる存在だったことは確かなのだ。しかも、誇り得る存在であった。エミシ文化の新たなる創造は、彼らに対する鎮魂だといってもよい。われら蝦夷の末えい―そう胸を張って歩く道のりの中から、いわゆる「中央」への迎合、卑下、反抗などの意味を含んだ「地方文化」ではなしに、個性豊かな「地域文化」が生まれてこよう」(29)。

日本社会の同質化がピークに達し、アイヌ民族等の存在をもって、それへの批判が起こる前に、東北のエミシの観点からこうした言説が出ていたのは、先駆的だったといえよう。

いっぽう、中曽根康弘首相の単一民族発言と同時期、「ケセン語」研究に勢力を傾けた山浦玄嗣は、著書『ヒタカミ黄金伝説』の中で、父と娘の会話仕立てでこう述べている。「アイヌ人だって国籍の上からは全く正当の日本人だ。東北人が日本人であるのと全く同じ意味で、あの人たちも日本人だ。しかし、お前がもし人種あるいは民族のことを考えているのなら、おれたち東北人は厳密な意味ではヤマト民族ではないのさ」。「ほんだら、何なの?」「エミシ族。まつろわぬ民・蝦夷の末裔だ」(30)。

山浦はエミシとしての民族意識について、著書『ケセン語入門』の中で、より詳しく述べている。「日本は、単一民族国家ではありません。……多民族複合国家です。……最大の多数派はヤマト系日本人です。東北人900万人は、文化的伝統、言語、歴史の点から明らかにこれとは異なる系列に属し、エミシ系あるいはヒタカミ系日本人というべきです。九州にはハヤト・クマソ系日本人がおり、沖縄にはリュウキュウ系日本人がいます。北海道にはアイヌ系日本人がいます。そして全国あちこちに朝鮮系日本人がいます。……我々ケセン人はヒタカミ系日本人に属する集団で、独自の言語と文化をもつ十万人の小世界を形成しているのです。……日本人は中央の文化的伝統とは異なる、我々の伝統も文化も言語も完全に無視した上で、『日本人は単一民族である』と称しています。日本人が、『日本人は単一民族で単一の言語を持っている』などと言うときに、彼等の頭の中には我々ヒタカミの民の民族としての存在も、言語の独自性も、歴史も、伝統も、一切存在していないのであります」(31)。ここには、エミシだけではなく、他のマイノリティ、旧植民地出身者や新たな移民までも視野においた、日本の多元・多文化社会観の雛形が提示されており、内なる多文化主義の先駆的な言説だといえる。

東北における蝦夷の末裔意識に関する言説は、他にもある。東北学の創始者・赤坂憲雄は、「岩手では、お前は蝦夷の末裔なのだから誇りを持て、と祖父に教えられたという人に何人も会っている」(2000年の対談)、「ついこの間ま

(30) 注 (15) 山浦玄嗣『ヒタカミ黄金伝説』28頁。
(31) 注 (24) 山浦玄嗣『ケセン語入門』5～7、18頁。
(32) 注 (10) 高橋克彦「蝦夷の精神史」『東北学』2号、223～225頁。

では、征服者である坂上田村麻呂を英雄として祀り上げる、それが東北人の多数派だったが、今は「蝦夷としての誇りを持って生きよ」ということを語る人たちが……存在する」（2003年の対談）と語っている[32]。

それに対し、高橋克彦は（2003年）こう述べている。「20年ぐらい前（1980年代前半）まで東北のほとんどの人たちが、自分たちは蝦夷ではないと思っていたと思う。それは蝦夷＝アイヌという時代があったからだ。アイヌの人たちと自分たちはたぶん違う。そうすると、自分たちは何かというと、坂上田村麻呂が東北を平定した後に移住してきた民の末裔であって、自分たちは蝦夷ではない、そういう認識だったと思う。ところが、その後いろんな研究が進んできて、蝦夷＝アイヌではないと定説化されてきた。それで、初めて東北の人たちが自分たちは蝦夷だったんじゃないかと感じ始めていった」[33]。

日本では長らく、蝦夷アイヌ説と蝦夷日本人説が拮抗してきたが、そうした二者択一ではない―言い換えればアイヌでもない、ヤマトでもない、固有のアイデンティティが、アテルイの復権と連鎖しながら、覚醒し、醸成されてきたといえよう。

原田信男は、明治という近代国家が、そのアイデンティティを天皇および古代日本に求めて、王政復古という形を採ったために、ヤマト＝日本という認識が多くの日本人の間に浸透し、6世紀頃、強大になったヤマト王権を、この国の源泉と見なし、その国家観や価値観によって、日本の列島社会に展開された歴史を見るという傾向があるが、ヤマト政権の歴史と、列島社会の歴史とは別物であるとし、内なるヤマト中心史観を自覚的に払拭し、列島の歴史に対する正確な認識を高めていかなければならないと説く。そうした観点に立って初めて、蝦夷の執勘な叛乱を、叛服常なき辺境民の心性に求める従来の考えは誤りで、ヤマトの軍隊はエミシの国を蹂躙する侵略軍にほかならないことが見えてくる[34]。

こうした視点の逆転・転換が、アテルイ復権運動を促していったとみられる。

5. アテルイ復権を導いた人々とその思い

「アテルイを顕彰する会」は2002年の声明で「アテルイ復権は運動によらなければならない」[35]と述べている。それ（アテルイ顕彰活動）は「中央から押しつけられた一方的な歴史観をはねのける運動」であると、及川会長は語っている[36]。1980年代まで、地元・水沢でもあまり関心が持たれていなかったアテルイという「耳慣れない人物」の名が、この地域で広まり始めたのは、1989年11月、「延暦八年の会」が「アテルイとエミシ展―巣伏の戦い戦勝1200年記念」を開催した頃からだといわれる[37]。1990年代から2000年代になると、アテルイは小説やミュージカルの主人公になり、東北以外へも広まっていく。アテルイ没後1200年にあたる2002年、顕彰・復権運動はピークに達した。活動の先端に立っていた人々は、どんな思いでそれを主導したのか、その言説に注目してみたい。

(1) 一力一夫河北新報社長

1980年代、「われ現代のアテルイたらん」と宣言した河北新報の一力一夫社長（1925年、仙台生まれ）[38]は、間違いなく、アテルイ復権運動を主導した一人である。アテルイ復権運動

(33) 注（1）高橋克彦・赤坂憲雄「蝦夷とはだれか」『日本再考』181～183頁。
(34) 原田信男「ヤマト中心史観を超えて」赤坂憲雄他編『いくつもの日本Ⅱ・あらたな歴史へ』岩波書店、2002年、3、5、6、12頁。注（13）谷川健一「蝦夷と隼人」『隼人族の生活と文化』367頁。
(35)『アテルイ通信』第39号、2002年11月、2頁。
(36) 水沢市教育委員会社会教育課『アテルイ没後・胆沢城造営1200年関連事業記録集』2003年、98頁。
(37)『アテルイ通信』第26号、1999年7月、2頁。
(38) 明治時代に流布した「白河以北一山百文」は、白河の関（現・福島県白河市）から北は、山一つが100文の値打ちしかないと蔑む言葉であった。河北新報は、創始者・一力健治郎が、東北の反骨精神を示すため、あえて「河北」と名付け、明治30（1897）年に創刊した新聞である。一力一夫は、その一力健治郎の孫である。
(39) 注（36）『アテルイ没後・胆沢城造営1200年関連事業記録集』2、75～77頁。

の原動力を訪ね歩く中で、筆者は行く先々でその名を聞いた。

アテルイ復権運動に携わった人々は、1982年2月、水沢市内のデパートで開かれた胆沢城展（水沢市教育委員会・河北新報主催）で初めてアテルイが一般社会に紹介され、それを契機にアテルイの実像を求める活動が起こったという。この胆沢城展で、茨城県鹿島神宮所蔵の「悪路王首像」（**図3**）が展示された。同年9月、一力は島津製作所に依頼し、その複製を作り、水沢市と宮城県東北歴史資料館に寄贈。それが歴史上の肖像が現存しないアテルイの顔として広まり、アテルイや東北古代史の掘り起こしが始まったという。一力は、講演会など様々な場でアテルイと東北の復権を主張した[39]。「われ現代のアテルイたらん」と宣言した思いを「東北を西の侵略から守る、その原点をなすのはアテルイである。だから私が現代のアテルイになって、東北を一丸となって西の侵略から大いに守る、そういう決意を固めた」と語っている[40]。

アテルイの名こそ出ていないが、一力が『蝦夷―東北の源流』（1979年）の序文で書いた文章には、その後アテルイ復権運動に精力を傾けた思いが、よく表れている。「われわれ東北人はエゾの子孫である。東北人には数千年来のエゾの血が脈々と流れている。この際、エゾとは何者なのかを学術的に詮索する必要はない。東北に生まれ、東北に住み、そして東北の土と化していった先祖から今日に至る東北人のことと理解して頂きたい。……現在の東北地方が中央政府の下に正式に帰属したのは、実に頼朝の鎌倉幕府設立以来、せいぜい800年前のことである」。それまで東北は「半独立国の観を呈していた」とする一力は「蝦夷が西方に侵略の軍を進めた事実は全くない。……勝手に侵入して来た政府軍に手向かったことはあるが、それはあくまで自衛のための蜂起にすぎなかった。それなのに常に賊と呼ばれ、反乱と称され、征伐、討伐と言われた」とし、江戸時代に至っても、武家の統領は「征夷大将軍」と呼ばれ、明治維新後の薩長藩閥政府になっても、その精神は受け継がれてきたと述べる。「歴史は常に勝利者の手によって書かれる。東北が後進地と言われるすべての源泉がここにある」が、「われわれ東北人はこうしたエゾの子孫であることを誇りとしている」――一力の言葉には、「白河以北、一山百文」を逆手にとって名付けられた「河北新報」社長の反骨精神が滲み出ている[41]。

(2)「延暦八年の会」と「アテルイを顕彰する会」

エミシの復権を全国にアピールする原動力となった民間団体が、胆江地域の「延暦八年の会」や「アテルイを顕彰する会」である。作家・佐藤秀昭が代表を務める「延暦八年の会」は、アテルイ率いるエミシ達が朝廷の大軍を破った延暦8（789年）年の「巣伏の戦い」にちなんで名付けたものである。同会は、その戦勝1200年目を記念して1989年に立ち上げ、数人の限られた有志で、アテルイの研究活動や企画展を開く活動などを始めた。佐藤会長は「一事が万事、中央指向から、故里を見直そうという考えのシンボルになったのが、エミシの英雄アテルイだった」という[42]。1990年代には3年がかりで、エミシ関連の文献を集めて目録を作り、水沢市立図書館に「アテルイ・ライブラリー」を創設した。1990年代、アテルイといえば、鹿島神宮の悪路王首像が使われることが多くなったが、その悪路王は、良民を苦しめ、田村麻呂に成敗されたという伝説通り、子ども達が怖がる形相をしている。そのイメージを払拭すべく、「延暦八年の会」は2000年、岩手県内外で1000人のアンケートを行い、CGで新しいアテルイの顔を作ったりもした[43]。

いっぽう「アテルイを顕彰する会」は、1991

(40)『アテルイ通信』第44号、2004年4月、4～5頁。
(41) 注（21）河北新報社編集局『蝦夷―東北の源流』1～2頁。
(42) 注（36）『アテルイ没後・胆沢城造営1200年関連事業記録集』75～77頁。岩手県ホームページ、NPO情報「延暦八年の会」（www.pref.iwate.jp）。
(43) 佐藤秀昭「文化東北、英雄の顔」『日本経済新聞』2002年2月25日。
(44) 延暦八年の会編『阿弖流為復権』アテルイを顕彰する会、2004年、はじめに。

年4月に設立された会員数200人以上を擁する全国組織で、会報「アテルイ通信」を発行し、巣伏の戦いでアテルイらが陣取ったとされる水沢市の羽黒山山中に「阿弖流為・母禮慰霊碑」を建立（2005年）する活動等を主導してきた。及川洵会長は著書『阿弖流為復権』（2004年）で、同会を結成した意図を、次のように振り返っている。「延暦21年8月13日、〔アテルイとモレの〕2人は河内国において斬殺された。それ以後『吾妻鏡（あづまかがみ）』や『元亨釈書（げんこうしゃくしょ）』などの古代末から中世初期の史書から、真実のアテルイは消え去り、坂上田村麻呂が「征した賊」は、悪路王や高丸となる。さらに中世・近世ではこれらの人物は、凶賊、鬼、悪人など、人々に害を与える人物として物語に登場する。こうしたアテルイやエミシに対するいわれのない理不尽な扱いに対し、憤りをもって復権をはかり、東北地方の人々のすばらしさを全国に知らしめなければならない」(44)。

(3) 関西アテルイ顕彰会（北天会）

1987年、高橋敏男ら関西在住の水沢出身者が同郷会を立ち上げ、アテルイ顕彰活動を始めた。高橋らは、大阪府枚方市牧野公園にある伝「アテルイの首塚」に注目し、「郷土の英雄アテルイの首塚なら、せめて掲示板でも設置して、アテルイの功績を称えたい、英雄の霊を慰めたい、郷里の人々の生命を守るために、自分の命と引き換えに、同胞の命と郷里の平和を願いながら、異郷の地に散った英雄を称えたい」(45)と考え、アテルイの供養碑を建立しようとしたが、枚方市の承認を得られなかった。同会はそれにめげず1990年、アテルイの碑の建立を目指して募金活動を始め、坂上田村麻呂を本願とする京都清水寺にかけ合って、その了承を得、1994年11月、境内に「阿弖流為・母礼之碑」を建立した（**図4**）。同郷会は1996年から「関西アテルイ顕彰会」（北天会）、2002年から「関西アテルイ・モレの会」と改称しているが、高橋は北天会会長時代、著書『大和政権と蝦夷の確執』で、この建碑によって国賊扱いされてきたアテルイ・モレの霊を慰めるだけでなく、今までの歴史観を見直す契機となり、敗者や地方の歴史が脚光を浴び、アテルイがメディアでもよく取り上げられるようになったと述べている(46)。

図4　アテルイ・モレの碑（京都清水寺）

1997年度、中学校歴史教科書7社のうち3社がアテルイを取り上げるようになる(47)。他社に先駆け、1991年から記載（「伊治呰麻呂の乱と豪族阿弖流為の抵抗」）していた教育出版版は記述を倍増し（1頁→2頁）、東京書籍版は、「蝦夷の抵抗」と題する1頁の中で「アテルイは、かつては朝廷に背いた悪人とされていたが、近年、地元民の利益を守ろうとした英雄として見直されるようになりました」と記し、京都・清水寺のアテルイ・モレの碑の写真を載せた。2002年度までに、8社中7社が中学校歴史教科書でアテルイを記述するようになったのは、アテルイ復権運動の成果といえる(48)。現行の中学校歴史教科書のうち4社が、清水寺のアテルイ・モレの碑の写真を載せている点からみても、その建碑運動はアテルイ復権に大きな役割を果たしたといえよう。

(45) 松坂定徳「アテルイ・モレの碑」2002年。
(46) 高橋敏男『大和政権と蝦夷の確執』北天会、1996年、15～16頁。
(47) 注 (2)「教科書、20年で様変わり」。
(48)「アテルイ記述（変わる・学ぶ、教科書が描く岩手5）」『朝日新聞（岩手県版）』2002年3月17日。
(49) 以下、特に注がなければ、映画「アテルイ」に関する記述は、以下の文献に基づく。『産経新聞』掲載の「長編アニメ映画『ア

(4) 映画「アテルイ」と鳥居明夫・シネマ東北社長

2002年夏に公開された映画「アテルイ」は、上映に至る過程そのものが、まさにアテルイ復権運動だったといってよい。この映画を製作した「シネマとうほく」は、盛岡出身の鳥居明夫社長（1948年生まれ）が1998年、仙台市で設立した映画会社である。

新聞の取材で、映画「アテルイ」製作の動機を聞かれた鳥居社長は、自分の故郷を誇れなかった青春時代を、かつての地方に対する偏見を交えながら振り返り、こう答えている。「私の学生時代はすべてが東京中心で、東北、中でも岩手は暗く貧しいというイメージでとらえられ、人前で胸を張ることができなかった。1990年代初め、それまで岩手出身でありながら、ほとんど知らなかったアテルイについて知る機会があり、鮮烈な感動を受けた。……東北を見直す題材になる、と確信した」。「これまでの中央からの歴史観を正し、不当に辱められていたエミシを正しく評価したい」「アテルイを通じて、子どもに自分が生きた土地に対する正しい認識をもち、胸を張って未来に羽ばたいてほしい」―そんな思いから1996年、足かけ6年間にわたる製作にとりかかったという[49]。

鳥居社長らは、水沢市長らに協力を要請し、2001年6月、「映画「アテルイ」制作上映運動推進岩手県民の会」を立ち上げた。古代東北史を学ぶ学習会などもしながら、制作費1億円の資金は、「みんなで作ってみんなで見る」を合言葉に、3万人が製作協力券を購入するなど、県民運動によって集めた。映画のシナリオは県民と議論しながら作り、人物や背景などの歴史考証は「延暦八年の会」が担当し、声優の子役は県内から公募―こうして映画「アテルイ」は、製作者（鳥居明夫）から監督（出崎哲）、声優、主題歌を歌う大友康平まで、東北人で手がけた作品となった。2002年7月末の試写会で、水沢市長は「郷土の歴史と文化を伝える運動がこれほど盛り上がったことはない」と語っている。

図５　映画「アテルイ」のポスター

この映画でアテルイは、英雄に相応しい面貌となった（**図5**）。映画製作委員会の呼びかけ文（2001年6月末）には、アテルイの復権を、現代東北の復権と重ね合わせ、自立した東北を目指したいとの思いが表れている（**資料1**）。その意志は、若い世代を含む、幅広い人々に広がった。劇団わらび座のミュージカル「北の耀光―アテルイ」を見て、アテルイ研究を始めたという男鹿市の小学6年生は、映画製作発表会（2002年1月、盛岡市）で「秋田や東北が遅れていると思われるのが辛い。僕もエミシの子孫だから」と語っている。水沢、盛岡での映画試写会では「歴史で習った蝦夷征討、何か知らずに受け入れていた」「アテルイのことを全く知らなかった。映画を見て、自分の中で何かが変わった」「私達の祖先に、こういう人がいたことを皆に知ってもらいたい」といった感想が寄せられた。

映画「アテルイ」では、大友康平が歌う主題歌の後に、エンディングが流れる。映画は、筆

テルイ』完成」（2002年8月6日）。『岩手日報』掲載の「銀幕にアテルイ躍動」（2002年7月30日）、「みんなで作った初の県民映画―アテルイ」（同年8月4日）。『朝日新聞』掲載の「古代蝦夷の英雄に学ぼう」（2001年9月初旬）、「古代東北の英雄に魅せられて―男鹿市舟越小の渡辺拓君」（2002年1月16日）。

(50)『アテルイ通信』第23号、1998年7月、6頁。

資料1　映画「アテルイ」製作上映の呼びかけ（抜粋）

（前略）7～8世紀、古代東北に暮らす「蝦夷」の人々は……豊かな精神生活を謳歌していました。……しかし7世紀中頃、大化の改新によって成立した新しい政権は、それまで大和朝廷の直接支配でなかった「蝦夷」の地を支配する政策をとり、侵略をはじめました。古代東北の人々は「まつろわぬ人」「俘囚」「蝦夷」とさげすまれ、「征夷大将軍」の名が示すように「征伐」の対象となり、10数年にわたって何万人もの朝廷軍と戦わざるを得ない状況に陥りました。豊かな自然に恵まれた北の大地、先祖代々、汗と涙で切り開いた農地を、親や子どもたち、同朋をいわれなき侵略から守るために、敢然と戦いを挑んだ蝦夷の勇者たち。延暦8（789）年、5万人を越える朝廷軍を打ち破った蝦夷の族長・アテルイ（阿弓流為）とその勇者たちは、何のために、何を願い、この大軍と戦い勝利したのでしょうか。しかし、アテルイとその勇者たちは「鬼」「悪路王」として、その後の歴史の中での評価は逆転して伝えられ、今岩手で暮らす私たちや子どもにさえ、彼らの「熱き思い」が伝わっていないのは本当に残念なことではないでしょうか。敵・坂上田村麻呂のすすめで、友人モレと一緒に和議のため上洛したにもかかわらず、斬首された悔しさや怨念を、「辺境の地」「日本のチベット」「白河以北、一山百文」といわれた現代の東北、岩手の私たちが忘れてはなりません。「地方分権一括法」が成立し、今新たな地方の時代が始まろうとしています。こうした時こそ東北・岩手の歴史を掘り起こし、中央権力の価値観にとらわれず、岩手を起点として未来につながる新しい、大きな価値観を見出し、これらを子どもたちと共有し、全国に発信していくことは極めて大きな意味を持つものと確信いたします。（後略）

2001年6月29日　「アテルイ」映画製作委員会

資料2　ATERUI will HERO
（映画「アテルイ」エンディング）

出哲魚（いでてつお）＊作詞

エミシの意味は気高き勇者。
アテルイはエミシそのもの。
アテルイは気高き勇者。
侵略者、その名はヤマト。
平和なエミシの民を、狂気のように殺し続ける。
平和なエミシの村を、次々と燃やし破壊する。
アテルイは立ち上がる。ATERUI will HERO。
エミシを侵略者から守るため。ATERUI will HERO。
エミシをヤマトから守るため。ATERUI will HERO。
侵略者の嘘から救い出せ。ATERUI will HERO。

侵略続けるヤマトの軍勢。奪う、犯す、殺す、燃やす。
犯罪行為のオンパレード。
守って戦うエミシの連合。
守れ、走れ、駆けろ。
やがてエミシは戦いに敗れ、ヤマトは歴史的な嘘をつく。
自らの犯罪、隠すため。
アテルイは立ち上がる。ATERUI will HERO。
エミシを侵略者から守るため。ATERUI will HERO。
エミシをヤマトから守るため。ATERUI will HERO。
侵略者の嘘から救い出せ。ATERUI will HERO。

＊出崎哲監督のペンネーム

者の想像よりも、ずっと抑え目に作られていた。それでいいのかと思った瞬間、流れ始めた歌に衝撃を受けた。本編や主題歌で抑えていた思い（本音）を一気に吐き出したかのようなその歌詞が、今まで活字にされていないことを知り、作詞者・出哲魚（いでてつお）＝出崎哲監督に確かめながら、文字化してみた（**資料2**）。歌は「ATERUI will HERO」と連呼する。出崎監督は“will”に強い意思を込めたと、筆者に語ったが、そのヒーローには、何世紀にもわたって賊、鬼、悪者とされてきたアテルイの復権への思いを込めて、エミシの民族的「英雄」なのだという思いが込められていると感じた。

(5) アテルイ復権をめぐるその他の動き

1997年1月から、河北新報で連載された高橋克彦の小説『火怨―北の耀星アテルイ』は、アテルイの知名度を大きく高めた。高橋は、同紙の「直言東北へ」（1998年2月10日）で、アテルイや奥州藤原一族を小説のテーマに選んだ理由について、東北人自身に東北の歴史を知ってもらいたいと思ったからだと述べ、こう続けている。「歴史上、東北の人物が悪者になったり、土地が辺鄙とされたりするのは、東北独自の史観がないからだ。……東北の歴史をひもとくことは、東北の根底にあるコンプレックスを打ち破ることにつながる。エミシが東北に住む人々

の総称だとすると、その歴史は東北に生きた人間が中央に立ち向かった歴史だ。現代の東北でも、エミシの魂は地域の誇りにつながるはずだ」[50]。

1989年から「アテルイの里」を掲げた地域作りに取り組み始めた胆江地域では、2000年～2002年度の3年間にわたり、アテルイ没後1200年記念事業をくり広げた。2002年7月の『広報みずさわ』は特集「アテルイ（阿弖流為）―故郷を守るために戦った男」で「我々の祖先は……蝦夷を蔑み、土地を横取りしようとする（大和）朝廷に抵抗した。……その当時の書物は、すべて近畿地方を主眼に書かれたもので、蝦夷の住む国は野蛮で、未開で、どう猛な人間の住む、文化水準の低い所とされている」とし、「祖先たちは、自分たちの尊厳を守るために戦った」「子どもたちが、アテルイとモライを誇れるように」との編集者のリード文もつけている[51]。及川洵は「この1200年間、生きている時は賊帥として、死後は悪霊や鬼といわれ、人々に恐怖を与えたとされる「つくられたアテルイ像」を簡単に消し去ることはできそうにない」と述べているが[52]、エミシの大地に生きる者たちが、自分達の子孫からも鬼や賊視された10数世紀来の伝承を、わずか10数年でここまで覆し、今は英雄として讃えてくれることを、アテルイ達は喜んでいるに違いない。

6. 東北の風土が育むエミシ民族

工藤雅樹は著書『蝦夷の古代史』で、蝦夷アイヌ説と蝦夷日本人説を比較した上で、こう結論づけている。「蝦夷は、日本民族とアイヌ民族成立の谷間にあって、北海道の縄文人の子孫とともに、アイヌ民族の一員になる可能性も充分にあったが、歴史の展開の中でアイヌ民族の一員となる道をとらずに、或いは阻まれ、最終的には東日本日本人の一員に組み入れられ、歴史的には最後に日本民族の一員になった人たち」だと[53]。東アジアにおいて民族（nation）という概念が誕生したのは19世紀末で、それを縄文の時代（という時代区分もまた近代以降の概念だが）に遡って適用するのは、当世を生きる者の主観のなせる業である。

そもそもアイヌ人を含めない日本人とは何者か―その設定自体に問題があるが、東北人は、なぜそうした二者択一を迫られねばならないのか。アイヌでも大和（民族と同義の日本）民族でもない、独自のアイデンティティを形成しては、いけないのか。それを躊躇させているのは、本稿でみた21世紀に至っても再生産されている、エミシ（東北）蔑視観なのかもしれない。「いま、なぜアテルイなのか」と題する文章の最後で、増子義久は「蝦夷征伐」以降、大挙して東北の地に移住してきた「大和の末裔」の1人かもしれない自身の心のどこかに、蝦夷と同一視されることへの抵抗が全くないと言い切れるかと自問しているが[54]、そうした「大和民族への誘引」が働くのは、見えないマジョリティの潜在（差別）意識に対する一種の怯えなのではなかろうか。

1992年に設立された「えみし学会」は、その規約（前文）で、蝦夷とは何か―それを明らかにすることは、現代日本の国家観に影響を与える課題であると記している。エミシとは誰か―それは「東北に住む人々の総称」（高橋克彦）、「東北に生まれ、住み、その土と化していった先祖から今日に至る東北人」（一力一夫）、「気高き勇者を意味する、東北人の直接の先祖の名」（山浦玄嗣）だという、アテルイ復権運動に関わってきた人々の定義を、筆者は尊重したい。より学術的に言えば、エミシとは「北方的要素と南方的要素を様々な比重でもつ諸集団からなる、複合的で多元的な民族集団である」という熊谷公男の定義に賛同したい[55]。エミシ自体が「複雑で多様な民族集団から構成されて

(51)「アテルイ（阿弖流為）―故郷を守るために戦った男」『広報みずさわ』591号、2002年7月、2頁。
(52) 及川洵『アテルイ研究入門』アテルイ研究会、2002年、220頁。
(53) 注（15）工藤雅樹『蝦夷の古代史』242頁。
(54) 増子義久「いま、なぜアテルイなのか」『週刊金曜日』436号（2002年11月15日）40頁。
(55) 熊谷公男「蝦夷論と東北論」『歴史の中の東北』河出書房新社、1998年、44、47頁。

いる」混合民族であり、北海道のアイヌとも、畿内を中心とするヤマトとも異なる、独自の集団であると考えることは可能である。実際エミシには、民族といい得る根拠があり、アテルイ復権運動によって、誇り得る歴史的な象徴も得た。アテルイを祖先の象徴・英雄とみる自意識は、大和民族意識には収斂され得ない。高橋克彦は2003年の対談で「1992年に始まる三内丸遺跡（青森県）の発掘調査で、東北に生きる人達が、自分達の歴史をヤマト王権によって征服されて以降の数百年ではなく、縄文を抱いたはるか1万年の時間の中で語ることができるようになった」と述べているが[56]、こうした考古学的発見も、エミシ民族意識の客観的な根拠を補完するものとなろう。

ルーツはそうでも、今の日本ではもうそんな大きな言語的、文化的違いはないのだから、拘る必要はないという意見もある。1986年、中曽根元首相の単一民族発言をめぐる議論が国会で行われた時、衆議院文教委員会で、塩川正十郎文部大臣は「ルーツはたくさんあったけれども……文化的に見ました場合に、日本民族はやはり一つの民族になっているのではないか」（11月26日）、「今同じ文化的な生活をしておる者、こういうことでは日本列島は現在一つの民族という解釈も成り立たないことはない」（28日）と発言している[57]。だが、山浦は、それに反論するかのように、こう述べている。「日本人が単一民族であるという説は……征服者が、被征服者をいいくるめるための見えすいた嘘にすぎません。……過去のことは水に流して、今は単一民族としてやってゆけばお互い平和で仲よくやれるから、その方がよいではないか。いちいち目くじらをたてて何の得になるか、と言う人もいます。しかしそれはあまりに一方的な言い草です。相手の人格を無視したやり方であります」と[58]。

東北には、山浦のように、エミシの末裔としての意識を明確に持っている人もいるが、アテルイ復権運動に関わってきた人の中でさえ、エミシといえる民族的特徴がなく、自分たちは大和からの移住者ではないかという、ある種の後ろめたさを持っている人々もいる。確かに、今の東北人の中には、東北以外からの移住者の子孫も多くいると思われる。しかし、本稿で紹介した21世紀の東北蔑視の言説は、大和からの移住者だったかもしれない人々を区別していない。ここでも、自己認識と他者の視線のギャップがくり返されている。

河西英通は、明治維新による民族国家・日本の中で、東北に住む人々は、未熟で後れている存在として差別的に認識されていたのであり、中央に住む人々と（ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」に照らしていえば）「一つの共同体」として想像されていたのでもないという[59]。そうであったなら、菊池のいった東北人の（異質性を剥ぎ取って対等な帝国臣民になろうとする）努力は、報われるはずもない。アテルイを自分達の祖先として復権させることは、必然的に、大和民族からの離脱＝自立、東北人が大和民族の幻想・呪縛から解放されることにもつながる。

これまで、別稿で再三述べてきたように、民族を民族足らしめるものは、つまるところ民族意識と、それを裏付ける（若干の）根拠である。1990年、河北新報で連載記事「日高見の時代―古代東北のエミシたち」を書いた野村哲郎は、その最終回「エミシの心」で、民族学者・菊池敬一が語った「東北の水を飲み、空気を吸えば、誰もがエミシになるのではないでしょうか」との言葉を受けて、「そうだとしたら、今日、東北に住む我々にも、エミシたる資格があるのではないだろうか」と締めくくっている[60]。

新潟県山間部の豪雪地帯を冬季に訪れた古厩

(56) 注（1）高橋克彦・赤坂憲雄「蝦夷とはだれか」『日本再考』173頁。
(57) 第107回国会衆議院文教委員会議録第2号、昭和61年11月26日、27頁。同第3号、同年11月28日、14頁。
(58) 注（24）山浦玄嗣『ケセン語入門』5～7、18頁。
(59) 注（11）河西英通『東北―つくられた異境』193～194頁。
(60) 野村哲郎『日高見の時代―古代東北のエミシたち』河北新報出版センター、2010年、4、210頁。
(61) 古厩忠夫『裏日本―近代日本を問いなおす』岩波書店、1997年、95～97頁。

忠夫は、「裏日本の気候的特質は、人々の行動を規制する豪雪にある。助け合わねば生きていけない。自分だけでは雪と闘えないから、いきおい地域の共同性は強くなる。また、雪には効率や成長率を争う生き方は通用しない」と述べている[61]。言語学者・真田信治氏は、独自の風土があるから、それを表現するための言葉が生れるのだという[62]。それらを言い換えれば、民族的なもの（文化や言葉や精神）は風土の中で育まれる、ということだ。ならば、東北の風土の中で育まれ、東北・エミシの歴史を共有する人は、たとえ先祖が誰であれ、エミシたり得るといえよう。

おわりに

勝者の描く歴史によって、アテルイは歴史の中に埋もれ、命を賭して自分達の国を侵略者から守ったエミシのリーダーたちは、田村麻呂の英雄伝説が流布される中、逆賊、悪者として、民間伝承の中では鬼にまで貶められて、語られていった。東北人は、勝者の描く歴史を史実と思い、故郷を守った祖先の英雄を、悪者、鬼として語り継いできたのである。だからこそ、東北が中央への従属を断ち切り、誇りをとり戻すためには、「日本」の歴史の中で賊と蔑まれたアテルイを、祖先の英雄として評価しなおす作業が必要だったのである。アテルイ顕彰・復権運動には、東北人の中に醸成されてきた負のイメージを払拭する願いが込められていたともいえる。

2011年3月、その東北を未曾有の大災害が襲った。一力一夫は1979年、「東北が真の意味で平等な日本の一員となって、まだ30年余しかたっていない」と述べているが、この大災害が露にしたことの一つは、東北は未だ、真の意味で平等な日本の一員になっていなかったという現実だった。赤坂憲雄の「東北はまだ植民地だった」という言葉[63]が象徴的だが、小熊英二は「日本」が戦後も東北を、東京への米・野菜・水産物の供給地、低廉な労働力の供給地、さらには電力の供給地として利用しながら、その結果、都市部での災害対策では対応できない「想定外の複合災害」と驚いている点を批判し、「震災後、『がんばれニッポン』という言葉が踊った。だが震災が浮き彫りにしたのは、『ニッポン』の一言で形容するにはあまりにも分断されている、近代日本の姿である」と述べている[64]。いっぽう「震災発生直後から、中央から発信される様々な言葉に違和感を覚えていた」という作家・熊谷達也は、その原因の一つは、未だ中央からの視線が、東北を辺境として捉えていることだとし、被災地や避難所での人たちの映像が「東北人の忍耐強さ」という言葉を伴って流されるのは、中央が東北を見る目が、旧来の「寒い、暗い、貧しい」というイメージからほとんど変わっていない証だとする[65]。

宮城県出身の山内明美は著書『「東北」再生』の中で、東北の「復興」にとって最も必要なのは、先祖から（或いは自然から）、当たり前のように与えられてきた「本当の土」と「本当の海」なのだと述べている[66]。東北が回復すべきは、中央に従属する周縁・辺境としての東北ではなく、東北固有の風土の中で育まれる民族意識を伴う、東北自身の自立と復権であるべきだと、筆者は思う。

(62) 真田信治『方言の日本地図』講談社、2002年、14、211頁。
(63) 赤坂憲雄他『「東北」再生』イースト・プレス、2011年、15、25頁。
(64) 小熊英二「東北と東京の分断くっきり」『朝日新聞』2011年4月28日。
(65) 熊谷達也「もう一つの東北」『朝日新聞』2011年5月22日。熊谷は「原発事故に端を発した食品や水の放射能汚染や計画停電、さらには買いだめの報道等。その瞬間にも、雪が降る寒空の下で人の命が失われつつあるというのに、見当外れにしか思えない東京での騒ぎは何なのだ？―という憤りが、東北の被災地の人々の間には、確実にあった。同時に、このまま見捨てられてしまうのではないか、という不安が心の底に横たわっていた」とも述べている。
(66) 注（63）赤坂憲雄他『「東北」再生』122頁。